

暮らしを支えるみなとの情報誌  
Vol.99 April 2022

100<sup>th</sup>  
since 1922  
Anniversary  
日本港湾協会

特集

港湾行政の主要施策  
令和4年度港湾関係予算のポイント

# 港湾

# 4

月号



公益社団法人日本港湾協会  
The Ports and Harbours Association of Japan

## 備讃瀬戸に開かれた港 下津井

### はじまりは一輪の綿花

岡山県南部に位置する倉敷市は、瀬戸内海に面しており、新幹線や高速道路、四国へと通じる瀬戸大橋など、交通機関が交わる人口約48万人の中国地方有数の都市となっています。

しかし、かつてこの周辺は「吉備の穴海」と呼ばれる一面の海が広がっていました。そこが陸地に姿を変えたのは、約400年前から本格的に始まった干拓によるものです。米の増産のために行われた干拓でしたが、海底だったところを乾かして陸地にするため、土地に塩分が残り、最初は米作りには適しません。そこで植えられたのが塩に強い植物であり、地中の塩分を吸い取ってくれる綿でした。

やがて江戸中期以降に商品経済が発達すると、綿は「換金作物」として農家が副業で栽培し、問屋街に集められて盛んに売買されるようになります。そうした取引で財を成した商人たちが建てた商家が、観光地となっている倉敷美観地区や、出荷を担った玉島、下津井などの港町に現在も残っているのです。



綿花

### 岡山藩の外港 下津井港

倉敷市には北前船の寄港地として玉島港と下津井港がありますが、今回は下津井港について紹介したいと思います。

瀬戸内海のほぼ中央、四国との距離が最も狭くなる備讃瀬戸に突き出した児島半島の南端に位置するのが下津井港です。

後背に広大な干拓地をもち、岡山藩の外港として物資の一大集散地であった下津井には、18世紀半ばすぎから北海道産のニシン粕を積んだ北前船が寄港するようになります。ニシン粕は綿の肥料として高い需要があったため、北前船のやってくる時期になると、問屋衆は遠方まで船を出してお得意様を迎えまし

た。最盛期には毎年50～60艘が港にへさきを並べたと言われますが、あまりにも船の争奪戦が激しいので、問屋衆は、抜け駆けをしないことや、決まった船頭と取引することなど、商売の取り決めを定め、それに従って商売を行うことにしたほどです。寛政13年（1801）に定められたこの決まりは「祇園文書」と呼ばれ、下津井港を見下ろす岬の上に鎮座する祇園神社に現在も保管されています。

また下津井港には四国渡海場としての役割もあり、讃岐の金毘羅へ参詣する人々で賑わいました。弘化3年（1846）に大阪の文人 暁鐘成あかつきかねなりが記した『金毘羅参詣名所図会』では「そもそもこの浦南海道通船の喉口なるが故、朝暮渡海の客船引きもきらず…繁昌なること児島郡南濱の第一というべし」とその様子を伝えています。

### 伝統の技が生んだ繊維産業

明治時代になると、生産が盛んだった綿を生かした産業を興そうと、この地で紡績所が次々に開業し、繊維産業の隆盛が地域の発展に寄与することになります。また伝統産業として育まれた織りや縫製の技術は、明治以降、足袋、学生服、作業着など、時代の移ろいとともにより多彩な衣料品製造へと展開していきましました。戦後になると、そうした技術を活かして国内初のジーンズが作られ、今では「国産ジーンズ発祥の地」として、その加工技術は世界のジーンズ産業に大きな影響を与えています。

現在、倉敷市は市町村別の繊維製品出荷額日本一の繊維のまちになっています。一輪の綿花から始まった繊維産業は、現在もこの地に根を下ろし、町の発展を支えているのです。



祇園神社から瀬戸内海を臨む